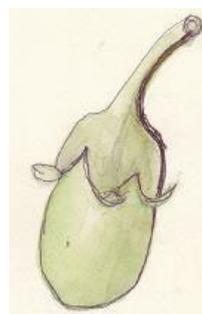


2024年8月1日発行

いのち・未来 うべ通信 30号

わたしたちは原発のない安全な未来を
子どもたちに残すことを願って活動しています

〒755-0029 山口県宇部市新天町1丁目2-36
宇部市民活動センター「青空」内 TEL 080-6331-0960 (安藤)
ブログ : <https://blog.goo.ne.jp/nonukes2013>



第13回定期総会のご案内

いのち・未来 うべ

昨年の8月2日に中電が上関町長に中間貯蔵施設建設計画を提案し、16日後に臨時議会で町長は反対派議員や町民の意見を聴こうともせず、計画受け入れを表明しました。それから1年が過ぎようとしていますが、その間にも今年3月23日「2024上関原発を建てさせない山口大集会」をはじめ、県内各地で反対集会や、勉強会を重ねてきました。

4月23日には中間貯蔵施設建設が可能かどうかのためのポーリング調査が始まり、このときにも県内外から仲間が、中止を求めて抗議行動に集まりました。今後もさらに県議会に請願書を提案したり、署名を集めるなど、出来得る限りの抗議行動を強めていかなければと思っています。

そんな中、定期総会を開催する時が近付いてきました。13回となる今年は、9月16日に開催することとし、場所は宇部市多世代ふれあいセンター第3講座室に決めました。総会の前には、原まきさん講演会を開催します。原まきさんは昨年4月23日、熊毛郡平生町議会議員選挙において、新人候補ながら606票でトップ当選されました。選挙戦で彼女は、平生町への影響や、町民の安全の観点から、上関原発計画反対を鮮明に訴えました。当選の後、上関に

中間貯蔵施設建設計画が浮上したのですが、原議員は、上関周辺自治体の中間貯蔵施設計画反対の議員たちと連携しながら、計画中止へ向けて頑張っておられます。

3人の子どもたちのお母さんとして、子どもが自然に親しむ自然保育がしやすい環境、学校給食の安全性も追求されています。

子育て世代のお母さん、お父さん、若い人たちにも聴きにきてほしいです。子どもたちを育てることに何が一番大切か、みんなが暮らしやすい町とはどういうことか一緒に考えましょう。当日、お話を聞かれてのご質問も歓迎します。

ぜひ身近な人にも宣伝の上、一緒にご参加ください。

代表 岡本正彰

～ 目次 ～

第13回定期総会のご案内	・・・ 1
ーある避難者の見た原発と社会ー	・・・ 2
請願の審議結果	・・・ 4
宇部から脱原発活動を	・・・ 6
本の紹介 ちょっと一息	・・・ 7
講演会のお知らせ 編集後記	・・・ 8

「あの日から」

—ある避難者の見た原発と社会—

連載第5回(最終回)

いのち・未来 うべ 副代表 横見 出

【帰郷後～現在】

職探しと出会い

帰郷して職を得るまで半年かかった。家内から「(失職していることが) 恥ずかしい」とプレッシャーをかけられ、子供の学校関係者に日中会わないよう、こそこそ暮らしながらハローワークに通った。関東で専門だった動物実験関連の仕事も独自に探しながらのつらい日々。結局、私の専門だった職は大分一つあったが山口県内には一つも無かった。

でも、出会いは沢山あった。もう時系列的な前後の記憶が定かでないが、まず2012年の「山口県避難移住者の会」と代表の浅野さんはじめ移住者の皆さんとのつながり。これは本当に心の救いになった。この出会いがなかったらどうなっていたことか。実は山口県での重要な出会いはほぼ全部2012年に集中する。まあ、失職中だったので時間だけはたっぷりあるから当然と言えば当然だ。

そして出会いラッシュのきっかけが山口県知事選挙だった。金はないけど時間はある。散々調べた結果、当時すでにたどり着いていた【原子力と自民党の関係がイコールである】という結論は、首長を自民党にすると原子力にからめとられることを意味し、県知事の選択は命にかかわる問題だと認識していた。だから人生で初めて自らの意思で選挙事務所を訪ね、怒涛の雰囲気飲み込まれて気づいたら選挙ボランティア活動に従事していた。その大波に揉まれながら市議の田辺さんに出会い、ナチュラルリストの笑多君に出会い、原子力反対の高岸君に出会い、上関原発反対の安藤さんに出会った。安藤さんのおかげで「いのち・未来うべ」とつながり、浅野さんから宇野さんと

つながり、「避難の権利」に参加することになった。

そして就職は高岸君の縁で太陽光発電システムの販売施工会社に決まった。建設業という未知の世界への適応は容易ではなかったが、周りの助けを得てなんとかやっていけた。そのおかげで、自民党の票田である建設業のざっくりとした仕組みを知り、発送電についての知識が得られ、仕事関係の交流範囲が広がっていった。太陽光発電を選んだのは、原子力が無くても社会が成り立つ方法を考えていたからで、最初は理論と実際の違いに驚いたり悩んだりした。途中、エネルギーコンサルの会社(主に熱エネルギー活用、その流れの木材活用を取り扱っていた)に出向したおかげで、社会におけるエネルギーとはなにか、何が必要か、持続可能とするにはどうしたらよいか、それは実際に可能なのか、などを考察し、自分なりの意見形成をすること出来た。建設関係は自民党大好き人間が多く、ある意味新鮮だった。未知の世界だった建設業を知り、その向こうにいる自民党の支持者の話も多く聞いた。太陽光のおかげで、上関原発の反対派のみならず、推進派の話も直接聞くことが出来た(施工を頼んだ工業者が推進派の先鋒みたいな立ち位置だった)。

そうそう、原発マネーの存在をリアルに感じる機会があった。働かなくとも得られる原発マネーによって破壊され失われつつある周防灘の小魚漁、煮干し業者からも直接話を聞く機会があり、金が壊した漁港に目を奪われた。太陽光発電の会社は固定価格買取制度の終焉とともに部門を閉じたため退職し再び無職になったが、太陽光発電の時の知り合いからの薦めで今は電気工事士として具体的な電気利用の現場(工場の電気工事)にいる。

核エネルギーは毒だ

当然のことではあるが、私は原子力の平和利用をうたい文句に始まった原子力発電には反対である。もっと言えば原子核のエネルギー利用(核

分裂にみならず核融合も)に反対だ。今考えるとBBCのおかげだろうが、子供のころから環境破壊に本能的に危機を感じていて(『地球は生きている』、とか、ジャック・クストーの『脅威の世界』とかのせいかも)、生き物に関わる仕事しかする気がなく、ついにはなんちゃって研究者にまでなった自称生物屋としては、原子でできている地球上のすべての生物は原子が集まってできる分子の組み合わせの糖質、脂肪やたんぱく質で十分。植物は光合成は光を電気エネルギーに変える仕組みで、原子は電気力で分子を形成し、光合成で得られた電気エネルギーと酵素を使って有機物質を作る。それを動物のみならず細菌や真菌までもが分かち合う。それが生物の世界。それで十分だ。だからどう考えても毒でしかない核エネルギーなどそもそも地球上では不要だと言いたい。太陽は核エネルギーなので、究極にシンプル化すると核エネルギーの恩恵を受けていると言えるが、地球上でその恩恵(太陽由来の光と熱)を安心して受けるためには約1億5000万kmという途方もない距離が必要だということだ。私が放射線影響から逃れる唯一の方法が距離を取ること(少量であれば鉛容器に閉じ込めるという方法有り)と言っている根拠がこれ。

福島第一原発惨事ではこのことを本能的に、かつ半分無意識に理解し実行した人たちが沢山いる。原発避難者って言われる人たちのこと。私が一番落ち着く「山口県避難移住者の会」はそういう人たちの集まりだから。「山口県避難移住者の会」は原発惨事によって山口県に住む互いの生存確認と会の存在提示(実は私も、という方がちらほら)、アースデイ等での原発惨事の展示とリアルな意見交換をゆっくりとしたペースで行っている。「避難の権利」は主に福島県からの避難者の権利保護のための活動を全国に散らばっている避難者たちが、かなり密なやり取りをして進めている。

「いのち・未来 うべ」には時折の参加で申し訳なく思っているが、平日のオフ活動に参加でき

るようになるにはまだ6~7年は必要で、今は難しい。

情報収集は人脈次第

あらゆる活動には情報収集、分析、判断が必須である。2011年~2012年はインターネットでの情報収集がかなり有効だった。公式発表データ(そうとう疑ってかかる必要あり)はもとより、オンオフ取り混ぜてつながりを確認し、調べ、交換して行動を判断していった。東日本大震災がきっかけでスマホとインターネットの連携の利便性と重要性(政治の力が及ばないため信頼性が高い)が強く認識され、急速にスマホ・タブレット経由のアクセスが増加し、それに伴って情報の質が急速に低下してきた。マスメディアのインターネット経由の情報(私は半分は情報操作目的と思っている)流通が増え、情報の信頼性=マスメディア発信の情報=正しい、一般人の情報=フェイクという印象操作(NHKは露骨)と相まってTV情報による世論誘導の手法をインターネットへも持ち込み、かなりの部分が成功しつつあると思われる。

さて、自分で理解し、分析し、判断できる範囲なんて限られている。一般的に自分の専門領域以外はからきし、のはずだ。情報の取捨選択が出来るスキルを全方向に持つなんてそもそも無理だし、経験の少ない若い人や難しいことを考えるなんて自分には無理、などと頭から決めつける人は情報発信者の誘導に導かれやすい。

では、どうするか?大学の研究で、研究が完成するまでに一番必要なものは実は人脈である。同じように専門(学術に限らず)以外の情報の取捨選択はその専門性のある人に問うしかない。人脈次第なのだ。判断はスキルを持つ人に委ね、その人を信頼するしかない。そう、この膨大な情報流通時代に本当に必要なものは人と人のつながり、人脈なのだ。

そういう観点から、AI勃興期の今こそAIに対する学習と情報収集が重要だと思う。AIは分析・

判断まで含めて情報を完全に支配できる。権力者がもし AI を牛耳ることが出来たら、気づかないうちに私たちは奴隷化され、家畜化されると思う。ただ、今の様子だと最初に奴隷化されるのは国家であって官僚のように思える。効率の悪い、数の多い一般人を相手にするなんて無駄だからだ。この点において私たちに残された時間は少ないと思う。

安倍政権の始まりは戦争の始まり

避難生活は最悪の安倍政権の始まりの頃と重なる。それは私から見れば、戦争が最終目的の政治の時代だ（本当の始まりは小泉政権だと思う）。そのために必要なあらゆることを「言い換え手法」に「国家ぐるみの隠蔽改ざん」を組み合わせて進めていた。安倍政権で急速に進んだものは、報道の掌握（NHK）、金融の掌握（日銀）、最高裁の人事掌握による司法の掌握（三権の集中）、学会議の掌握、大企業優先政策（円安等）による産業界の掌握での産官学の掌握。見事なスピードで全権力の掌握が完成したと思う。

残すは憲法を改変して基本的人権を奪取し、報道で誘導しながら一握りの支配階級（都合の良い手足）と大多数の貧するもの（金さえ与えれば容易に兵士となる）に分けるだけだろう。増税致し方なし、という報道さえしておけば度重なる増税にも従順に従い勤勉に働く今の日本人社会では、革命どころか暴動すら起こらないことに自信を持っているだろう。原発惨事によって汚染された土地にすら、権威の名のもとに安心を唱えれば帰還したり、移住したりする人々を見てさらに自信を深めたことだろう。日々苦しくなる生活の中で、如何にすれば今の異常な政治による放射能禍、いずれ来るであろう戦禍から家族を守ることが出来る物言う社会へ変えていけるのか、答えが見えないまま丸 12 年が過ぎてしまった

「上関町に計画されている中間貯蔵施設に反対の意思表示を求めることについての請願」の審議結果

請願の審議結果について

令和 6 年 6 月 24 日に提出されました下記の請願は、令和 6 年 7 月 5 日、山口県議会定例会において「不採択」と決定しましたので、お知らせします。

記

不採択となった請願

- 上関町に計画されている「中間貯蔵施設」に反対の意思表示を求めることについて

令和 6 年 7 月 5 日

いのち・未来 うべ

代 表 岡本正彰 様

山口県議会議員 柳 居 俊 学

私は請願理由を仲間と話し合い何度も書き直し、県議会棟へ出向き、会員の藤本県議と紹介議員を募り、提出したのですが、いとも簡単に請願書は不採択になりました。請願の審議結果が上に載せましたように届いたのですが、不採択の理由が一行もありません。あまりにも、不誠実ではないでしょうか。

県民の安心・安全を守ることが県議会議員の仕事ならば、中間貯蔵施設に反対の意思表示を求めることについての請願を簡単に不採択にするなんて、あり得ないと思うのですが・・・？

岡本正彰



宇部から脱原発活動を

事務局長 安藤公門

今年の3月集会の呼びかけを宣伝カーでフジグラン前で行っていたとき、年配の女性が駆け寄ってきて、マイクを握っていた岡本さんの手をしっかり掴み、「本当にひどいですね。頑張ってください」と言い、私には、「漁協の人ですか」と声をかけてきました。「いいえ、そうではありませんが、海を守るのはみんなの役割だと思いますので」と答えたら去っていきました。

また別の日には、男子高校生が声をかけてきました。フジグランの駐車場はいつも車がいっぱいなのですが、この日は隙間があって、「中間貯蔵施設反対」のノボリがよく見えたのでしょう。「あの～、原発反対の団体ですよ。宇部にも脱原発グループがあるんですね。初めて知りました。今日は用事があるので無理ですが、また話を聞かせてください」と言って足早に店内に戻りました。

年末に環境問題のある集会に参加したとき、帰省してたまたま参加した人が「えっ、宇部にも脱原発グループがあるんですか」とある種の驚きの表情を見せました。その人の驚きの意味は、原発立地予定地から遠いのに、という意味なのか、「宇部の市民運動がそこまでやるまい」というニュアンスにもとれました。どうやら、私たちの宇部市では、脱原発の市民運動があることは、奇異の現象に見られているようです。

宇部市西岐波の床波在住の元山口県議の宮本輝男さんは、「上関原発も、使用済み核燃料の中間貯蔵施設についても、実はここから見えるところで起こっている。天気の良い日には長島も祝島もはっきり見える。あそこに、原発・核施設ができると思うと心配になる。なによりも、洋上には何の壁もなく、事故で放射線が拡散された場合、被曝を止めようがない。それを思うと心配でなりません」と語っています。

上関町の中国電力による上関原発計画の反対運動は、42年を越えています。その運動の原動力となっている、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」について、どうして運動が続けられるのか、と疑問が出されます。そして、よく出される答えは、

「祝島のみなさんから見れば、原発予定地の長島・田ノ浦海岸は、朝起きて太陽を拝むときに一番先に見えるところであり、原発の建物を想像してしまう。それも毎日。対照的に四代集落は、田ノ浦の海岸に距離では近いのに、しかし山が裏手にあって見えないうえに、原発の話題が出て、見えるところにならぬから想像も働かず危機感を持つこともない」というものです。これは正しいのでしょうか。全国の原発立地地点で証明できれば正しいと言えるかもしれませんが、目の前に原発があっても、それを許している地域もたくさんあり、一概には言えないとも思えます。祝島のみなさんの取り組みを支えている別の要素、原発の現場で労働者として働いて危険性を身にしみて知っている等、があるので何とも言えませんが、要因の一つとは言えるでしょう。

話は変わりますが、私は、原発が引き起こす危機を以下の3点で捉えています。

- I 破局的事故が、いつ起こっても不思議でない装置である。原発本体の事故、地震・津波・火山爆発などの災害と複合的に起こり、加速される。2024年元旦の能登半島地震は、あらためて示しました。
- II 原発と原発利権体制が、社会全体を蝕み、危機に備える力を社会全体から奪ってしまうこと。原発推進の嘘と御用論説で、政権、企業、マスコミ、教育現場、学者研究者から正しく認識し、対応する力を奪ってしまうこと。逆に、危険な原発を地方の過疎地に押し付けて平然としている都市住民を大量につくっていること。
- III 戦争の準備、軍備の増強と原発が結びついて進行すること。原発は、もともと核兵器製造のために、とくにプルトニウム製造のために電気をつくるという戦争のための「平和」偽装です。軍事費の増大と歩調をあわせ、核武装のための原発回帰が急速度で進んでいます。

いずれ、様々な機会を活かして話していきますが、ここでは、IIの社会的危機の進行について若干見てください。一言でいえば、原発が社会を絞め殺す・息のできないように窒息させてしまうことです。

例えば朝日新聞の青木美希さんは、数々の原発被害の実相を伝えるルポルタージュを刊行していま

す。

その取材は、当事者に密着し、その声と実態を伝えるものです。政府、福島県、東電によるごまかしを許さず表現しています。民主主義の基礎は、それぞれの自由な発言が尊重されることですが、その基礎には事実に基づく報道が不可欠です。ところが、朝日新聞は、青木さんを第一線の取材記者から解任し、記事にタッチできない部署に配置転換しています。彼女は、休暇を使って取材しています。

2011年3月11日、東京電力福島第一原発の過酷事故。この日、どこにいて、どんな対応をしたのか。大人から物心ついた子どもまで生涯忘れることのない日付です。影響を無視できる人は、いません。

一番大きな教訓は、原発は事故を起こすものだ、しかも、取り返しのつかない過酷事故を起こすものだということです。万が一はあってはならないし、事故はないとされてきたことが、実際に起こった。この厳然たる事実からまずはスタートすべきです。事実、原発関係者・推進者は、その後の原発の再稼働の説明で「事故は起こるし、それへの対応はとる」と言うようになりました。

さらに、福島原発事故によってもたらされたのは、「日本が戦前の体制を地肌のまま残していることだ」（白井聡さん）、「原発の材料であるウラン発掘と加工でオーストラリアのアボリジニなどの現地住民の犠牲によってなりたっている産業である」という告発（津島祐子さん）、さらに原発による被曝被害に対して国の政策は「棄民政策」でありという弾劾？など、日本の社会と政治を根本的に問うものでした。

さて、それらの根本的な突きつけと並んで私が訴えたいのは、「原発を過疎地域につくる」「人の多い都市圏には危険でつくれない」「だから地方の過疎の人たちには申し訳ないが交付金などを出すので我慢してほしい」というのは、「原発の本質を隠す欺瞞擬制ではないか」ということです。

3・11事故では、福島原発から80キロ圏は退避するように（アメリカ政府）「最悪の場合、250キロ圏内に被害が及ぶ」（近藤俊介、原子力保安院委員長＝当時）という指摘が計算の上、行われたことは軽いことではない。様々な偶然の要素によって、

「幸運」に助けられて「最悪の事態は避けられた」とされているが、実際はどうなのか。（偶然の幸運については、樋口英明さんの講演で詳しく説明されているので参照）

原発の過酷事故の実態は、地方の過疎地であろうが、東京のような大都市のどまんなかであろうが、本当は変わりがないということです。被曝によって被る実害は、原発が日本列島のどこにであろうが変わりがないということです。都市圏は、大騒ぎになるから（「パニック」）被曝させたままに放置したのが実情です。実際、福島県でも他の県でも、東京都で神奈川県でも実際の被曝はあり、気づいたり自覚症状があった多く的人是、関西などに避難しています。横見 出さんは、神奈川県川崎市から下関市に避難しています。医師の三田茂さんは、被曝の多さから岡山県に医院ごと移しました。東京都の土壌検査はどうなっているのか、検証が必要です。原発はどこでも危険。それを隠し、原発を進めるために「地方に犠牲になってもらう」というポーズをとっているのです。

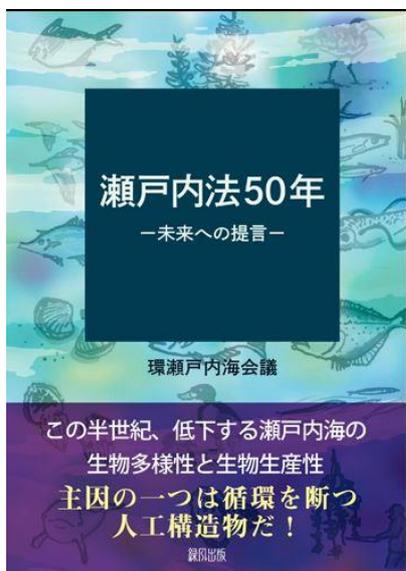
福島原発事故で拡散された放射能は、今地球をまわっています。その上にアルプス汚染水を流しています。核による汚染は、私たちに跳ね返ってきます。人類と共存できないのが原発です。

昨年8月に西・上関町長が使用済み燃料の中間貯蔵施設受け入れを強引に進めて以降、柳井市、周防大島町、平生町などでは、住民の反対運動が巻き起こり、田布施町では、連合婦人会の反対を求める陳情書が議会に出されています。同じ、瀬戸内でも宇部市は、当会が請願を県議会に出したものの、宇部市長も宇部市議会にも大きな動きはありません。見えない・感じないから動かないのでしょうか。

今度、街頭宣伝で会った高校生に出会ったら、以上のような話をし、だから他ならぬ、この宇部でこそ大きな力になる運動が必要なんだと語りかけようと思います。

本の紹介

『瀬戸内法 50 年—未来への提言—』
環瀬戸内会議 編著



緑風出版 2024年6月刊

ちょっと一息

安藤公門

飼っているヤギが表紙をかざりました

安溪遊地さん <https://ankei.jp/yuji/>

みんなつど (みんなの集い) 47号

https://ankei.jp/yuji/file/2406/002885_f1.pdf



ヤギのクリ (マロン) と

田ノ浦海岸へ

7月20日

『なぜ日本は原発を止められないのか?』
青木美希 著



文藝春秋 2023年11月刊

平生町の原まきさんと海岸清掃&泳ぎ

原まきさんフェースブック

<https://www.facebook.com/maki.hara.315>



ヤギに関心のある人は、フェースブック

<https://www.facebook.com/kimito.ando> からメッセ

ンジャーでお問い合わせ下さい。

見学・体験歓迎です。



～未来への種まきをご一緒に～

原まきさん講演会

「原発」も「核のゴミ施設」もない瀬戸内海を
子どもたちに残そう

と き：2024年9月16日（休日）午後1時半～3時

ところ：宇部市多世代ふれあいセンター 第3講座室

入場無料・お申込み不要

主 催：いのち・未来うべ（連絡先：安藤公門 tel 080-6331-0960）

午後3時～4時 第13回定期総会

昨年8月、上関町に使用済み核燃料の中間貯蔵施設の計画が持ち上がり、周辺自治体から不安や疑問の声、抗議の声があがっています。2市4町の議員連盟の中心になって活動されているのが、平生町議員の原まきさんです。いのち・未来うべでは、第13回定期総会に併せ、周辺自治体の現地の実態をお聞きします。

また、土台となっている「自然に沿った暮らし」についても語っていただきます。

原まきさんプロフィール

1977年 岡山県生まれ。

2000年 山口県に移住

あすの山口を創る県民会議事務局 就業

2007年 結婚、長男出産

2014年 グリーンコープやまぐち周南地域理事

現 在 熊毛郡平生町議会議員

ダイドック冒険学校の事務局

夫、子どもたち家族5人で畑や田んぼでの自給的な暮らしをしながら、大野地区にて子育て中のお母さんグループで野菜作りに励んでいる

～編集後記～

敦賀原発2号機、新基準「適合せず」再稼働不許可の見通し。2024年7月27日新聞(朝日、毎日)

地図を開いた原発立地場所は、西から高浜、大飯、美浜、敦賀・・・と北上する。近くの海は、若狭国定公園、越前敦賀海岸国定公園となっている。

山口県上関は、中間貯蔵施設受け入れを表明しているが、ここは瀬戸内海国定公園である。この景勝の地、何よりも豊かな海の幸の地に、なぜ原発や中間貯蔵施設が易々と計画されるのだろうか。（編集部 T）